

第1次世界大戦後のプルースト受容：『花咲く乙女たちの陰に』とゴンクール賞の余波

禹, 朋子
帝塚山学院大学リベラルアーツ学部：教授

<https://doi.org/10.15017/26085>

出版情報：Stella. 31, pp.115-139, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

第1次世界大戦後のプルースト受容^{*}

——『花咲く乙女たちの陰に』とゴンクール賞の余波——

禹 朋 子

『失われた時を求めて』の第2篇『花咲く乙女たちの陰に』が発売されたのは第1篇出版から6年も経った1919年6月のことである。空隙の理由はむしろ第1次世界大戦であった。この第2篇が同年12月にゴンクール賞を受賞したことでプルーストとその作品は一気に名声を得、これが定着して現在に至っている、というのが伝記や文学史のしばしば教えるところである。

たとえば受賞の6年後、作品最終篇の刊行に先んじて出版された最初の伝記、レオン・ピエール＝カン『マルセル・プルースト、生涯と作品』¹⁾は、ゴンクール賞受賞の意義を以下のように強調している——「ゴンクール賞がこれほど突然の名声を作家にもたらしたことはまれである。[...]マルセル・プルーストの栄光が始まろうとしていた……このとき彼は48歳、残された人生は3年だった」²⁾。そして後続の章には「栄光」というまさに象徴的な題が冠せられるのである。イギリス人研究者ジョージ・ペインターによる『マルセル・プルースト』(1959年)もまた「受賞」と題した章のなかで、「以後、彼の栄光は確立された。威光は絶大にして、いや増すばかりであった」³⁾と断言している。

文学史の教科書においても同様の表現が見受けられる。ギュスターヴ・ランソンの『フランス文学史』⁴⁾は1895年の初版以来、長く読み継がれた文学史の参考書である。1929年にピエール・テュフロの協力を得て改訂され、『フランス文学史図解便覧』とタイトルを変えたが、こちらも1950年代に入ってから増補改訂された好著である。同『便覧』の初版は近年の小説のひとつとして『スワン家の方へ』の書名を挙げるだけだが⁵⁾、1932年版は「戦後の作家」と題する1章を新たにもうけ、ジッド、ヴァレリーとともにプルーストの生涯と作品にも5ページを割いている——「第1篇〔『スワン家の方へ』〕が1913年に刊行されたが注目を集めることはなかった。いっぽう、第2篇〔『花咲く乙女たちの

陰に』は1919年にゴンクール賞を獲得し、これが栄光の始まりとなった」⁶⁾。この記述からは、広く読まれた参考書においても、ゴンクール賞受賞がプルーストのキャリアにとって決定的な出来事ととらえられていることが見てとれる。

しかしながら後述するように、受賞作に対する初期批評には賞賛だけでなく厳しい批判も少なくなかった。第1篇発売時にも認められた現象であるが、この時期のプルーストの書簡には、記事への不満や批判が随所に見られる。以後も全7篇からなるこの小説は、続篇刊行のたびに様々な批判を浴び続ける。ティエリー・ラジェは、ゴンクール賞受賞を目指すプルーストの根回しから、投票の詳細、選考委員の態度、受賞後のプルーストの反応を詳細に分析した論文を1983年に発表した。その中でラジェは、受賞にまつわる様々な報道とこれに対応するプルーストの活動を「騒動」と呼び、そのわりに販売部数は伸びなかったと結論している⁷⁾。

ジャン＝イヴ・タディエは1996年出版の伝記において、プルーストが受賞のあとに得たものは「栄光ではなく、完全な成功とすら言えず、ただ識者の間での知名度であった」⁸⁾と述べている。このように、プルーストが受賞によって得たものについて先行研究の意見は分かれている。ただゴンクール賞受賞が『花咲く乙女たちの陰に』の受容に大きな影響を及ぼしたことは、関連記事数の多さから見て疑問の余地がない。本稿では、同時代の記事や論評の参照にもとづき、小説第2篇の初期受容の具体相を明らかにし、あわせて文学賞が作品受容に与える影響について考察する。

関連資料の総体

『花咲く乙女たちの陰に』は単独で刊行されたのではなく、第1篇『スワン家の方へ』の再版、および『模作と雑録』(1900年から1909年にかけて執筆された文体模写・評論を収録)と同時に、1919年6月20日に店頭に並んだ⁹⁾。したがってこの時期に新聞や雑誌に掲載された記事は、新刊に対する批評とそれ以外のプルースト関連記事とに截然と分けることはできない。多くの評者は『花咲く乙女たち』と同時に、既刊の『スワン』にも触れている。また『模作と雑録』の評においても、プルーストは『スワン』や『花咲く乙女たち』の作者として扱われている。プルーストはこの年、友人の画家ジャック＝エミール・ブランシュの『画家の言葉、ダヴィッドからドガまで』¹⁰⁾に序文を寄せたほか、

翌年1月には「フロベールの文体について」¹¹⁾と題する論考を『新フランス評論』に発表した。これらに対する評論についても事情は同じである。かかる状況は年を経るごとにより顕著になっていく。つまり『失われた時を求めて』の各篇が出版されるたび、紙誌掲載の記事の多くは単なる新刊批評というよりは、むしろ「作品群」あるいは「作家」に対する論評となっていくのである。したがって本稿が関連記事に数えるものは、必ずしも純然たる小説批評ばかりではない。

関連記事の範囲については、主として記事の発表日付とプルースト作品の販売開始時期との関係という時間的区分によって定めた（ただし一部については記事内容によって判断した）。前述のとおり、小説第1篇と第2篇の刊行の間に時間的な隔りがあるため、関連記事の掲載開始時期特定は容易である。NRF社への著作権委譲後、初の続刊予告となった『エクセルシオール』紙1917年10月17日号の記事が最も早いものと思われる¹²⁾。しかし第2篇と第3篇『ゲルマントの方I』に対する批評との区別については具体的な記載内容に立ち入る必要がある。第3篇の最初の予告は『国民生活』誌が1920年9月25日に掲載している¹³⁾。ところが同月25日と28日付で『思想と本の批評』と『ル・ブティ・ヴァール』紙に掲載されたふたつの記事は、『ゲルマントの方』にはまったく言及していない¹⁴⁾。したがって後者2点は『花咲く乙女たち』までに対象を限った批評として本稿で扱う。

出版に先立つ宣伝活動

『スワン家の方へ』刊行に際して当時の出版者ベルナール・グラッセが作者プルースト宛書簡で述べた宣伝の方法とは出版予告・抜粋と書評であり、実際にその手法を用いて第1篇を売り出したのであった¹⁵⁾。版元の変更によって第2篇以降はNRF社から出版されたが、その宣伝方法は第1篇の場合とは違っていただであらうか。

『花咲く乙女たち』は1919年6月に発売された。印刷完了日はその半年以上前の1918年11月30日であるが、先述のとおり最初の予告が『エクセルシオール』に掲載されたのは、それよりさらに1年以上前のことである。第1篇出版当時、プルーストがグラッセ社に示していた計画では作品は3篇で構成される予定であった。じっさい、グラッセ版『スワン』には「1914年発売予定」とし

て『ゲルマントの方』『見出された時』の両篇が予告されている¹⁶⁾。しかし計画は第1次世界大戦勃発により大きく変化する。戦中、出版が中断された間に大量の加筆が施されたためである。また1916年8月にはグラスセが続編の出版を断念し¹⁷⁾、NRF社がこれを引き継いだ。その後も変更を加えるとはいえ、プルーストは翌年10月にはNRF版の校正刷を受け取り始める¹⁸⁾。上述の『エクセルシオール』の記事は丁度このころに掲載されたのである。

プルーストは、ペンネームで書かれたこの記事の筆者が知人のフラマンかどうか知らないかとリュシアン・ドーデに尋ねている。質問への回答は見つかっていない¹⁹⁾。しかし問題の『エクセルシオール』掲載記事は、作品が『スワン家の方へ』『花咲く乙女たちの陰に』『ゲルマントの方』『ソドムとゴモラ I, II』『見出された時』の5篇構成であると紹介し、「この作品は5枚のパネルからなる頭脳的全活動の巨大なフレスコ画」²⁰⁾であると述べている。NRF側の関与があったのか否か、背景を知る手がかりは残されていないが、出版社ないし作者からの情報提供なしには、この段階で続刊の構成を知りえたとは考えにくい。

1918年8月29日付『アクション・フランセーズ』が第2篇発売予告を掲載した経緯についても²¹⁾、これを直接証言する資料は見当たらない。しかし1段20行あまりのこの短い記事も予定されている5篇のタイトルを正確に挙げている。また同紙の主幹レオン・ドーデはプルーストの知人であり、その弟リュシアンは親しい友人であった。少なくともリュシアン宛書簡から、プルーストがこの記事の切り抜きを受け取ったこと、またその兄によろしく伝えるようにと頼んだのにリュシアンがこれを果たしていないことは分かっている²²⁾。プルーストは作品の評価にかかわる部分については婉曲に不満を表明している。だがこの一事をもってプルーストの関与はなかったとは断言できない。後述のとおり、プルーストは自ら依頼した記事内容を批判することもあったからである。『アクション・フランセーズ』の記事についても『エクセルシオール』のそれと同様、作者あるいは出版社の関与が考えられる例であろう。

抜粋についてはどうだろう。本編発売前に発表されたものとしては、『新フランス評論』1919年6月号掲載の「別離が引き起こす悲しみと忘却の不規則な進展の軽い素描」²³⁾が唯一の事例である。これは50頁にも及ぶ長い抜粋で、版元変更の恩恵はかかる抜粋の掲載にも表れている。以上の3点が『花咲く乙女たち』発売に先立つ宣伝と考えられるものである。

出版時の広告

『スワン家の方へ』発売の際、版元グラッセばかりかブルーストも自著に関する記事を掲載してくれるよう友人・知人に対し積極的に働きかけていた²⁴⁾。『花咲く乙女たち』の場合はむしろ出版社側からの宣伝活動が主体であり、作者による依頼ははっきり確認できた記事は、後述のとおり、ゴンクール賞受賞前に1点、受賞後に1点、いずれも『フィガロ』に掲載されたものである。

出版社が各紙に依頼したのも批評記事ではなく、出版情報の掲載が中心であった。ブルーストの新刊・再版の同時発売にあたり、NRF社は1919年6月20日付『フランス書誌』第3部で3作すべてを挙げている²⁵⁾。翌週28日、NRF社のギュスターヴ・トロンシュはブルーストにこう書き送っている――

もうご覧になりましたとおり、あるいはこれからご覧になるとおり、御著書の広告を多数、とりわけ「書籍情報」(主要10紙)、『メルキュール〔ド・フランス〕』、『パリ評論』、そしてむろん『新フランス評論』に打ちました。さらに御著書は『フィガロ』の「書店店頭 chez le libraire」欄の掲載対象にもなります。²⁶⁾

「書籍情報」欄というのは、依頼内容にもとづき、主として新刊本の著者・書名を出版社ごとに掲載するコーナーで、記述は極めて簡潔なものである。

総合書簡集の編者フィリップ・コルブは、ここで言及された広告として、6月5日付『フィガロ』(第3頁)、同27日付『デバ』(第3頁)の「書籍情報」、同29日付『フィガロ文芸付録』の「書店店頭」欄(第4頁)、そして『メルキュール・ド・フランス』7月1日号と『新フランス評論』同日号の広告ページに掲載された宣伝広告の5点を挙げている²⁷⁾。筆者の調査によれば、『新フランス評論』は翌8月号にも同様の広告を出しているし、その他にも『ラントランジジャン』『タン』『エコー・ド・パリ』『アクション・フランセーズ』の「書籍情報」欄にも記事が掲載されている²⁸⁾。またトロンシュが挙げている『パリ評論』の広告とは、こういった欄ではなく、7月15日付のフェルナン・ヴァンデレムによる書評を指しているのではないかと思われる²⁹⁾。というのもトロンシュは、上記引用の書簡に先立つ6月24日、献本送付先についてブルーストの希望を尋ねる際、ヴァンデレムからは電話で依頼があったので既に送付したと述べているからである³⁰⁾。この記事はその冒頭で、『スワン』『花咲く乙女たち』の両篇について「あまりにも風変わりで、あらゆる原則から自由で、要するに

余りに並外れているので、その欠点や奇妙な点をすべて述べようとするとう疲労困憊し、何を取り上げてよいかすら分からなくなってしまう」³¹⁾と述べ、その長さや心理分析の微細さ、読み返さないと理解できない文体、時代遅れの設定などに触れたうえで、にもかかわらずプルースト作品は多くの喜びをもたらしてくれると論評する³²⁾。トロンシュがヴァンデレムに献本したことで書評が掲載されるのを期待し、プルーストにその旨報告したことはうなずけるが、記述内容そのものはいささか手厳しく、これをもって「宣伝を打った」とまでは言えないかもしれない。

プルースト自身の働きかけによって掲載された記事というのは、7月7日付『フィガロ』第1面を飾った「ある文学的カムバック」³³⁾である。「バルトロ」というペンネームが使われているが、執筆者はプルーストの友人ロベール・ドレフェュスに他ならない。プルーストは作品発売の数日前、『フィガロ』の編集長ロベール・ド・フレールに新著3冊について記事の掲載を依頼し、もし彼自身にその時間がないなら、代わりの候補としてルイ・ド・ロベール、エドモン・ジャルー、フランシス・ド・ミオマンデルの名を挙げている³⁴⁾。結局はロベール・ドレフェュスが担当したが、それを謝す書簡のなかでプルーストは、記事が大変気に入ったとしつつ、また苦言も呈している。思わしくない健康状態をおしての戦時下の執筆継続が「殉教」と見なされたり、作品の特徴として、「失われた時の探求」という主要テーマではなく、ただ分析の詳細さばかりが強調されたりしたからだ³⁵⁾。その数日後にはウォルター・ベリーに宛てた書簡でもこの件を取り上げ、「絶対確かなのは、私がジャーナリストに苛立っているということです」³⁶⁾とまで書いている。新作を発表するたび、プルーストの書簡には記事の内容に関する批判が頻出するが、反論はしばしば執筆者自身に宛てても書き送られた。自ら依頼した記事を旧友が十分な好意と配慮をもって執筆した場合でもこの通りであるから、特定の記事が出版者側からの手配によるものであるかどうかを、プルーストの書簡のみから判断することは難しい。前出の1918年8月29日付『アクション・フランセーズ』掲載記事について出版側の関与ありと判断したのはこのような理由にもよるのである。

受賞以前の資料

筆者が調査したかぎり、ゴンクール賞受賞決定までに発表された関連資料の

数は45点である³⁷⁾。出版予告記事は前出2点の他に、ジャン・ジロドゥが『フイエ・ダール』誌5月号に論評を載せており³⁸⁾、これを加えれば計3点。出版社が手配したものは、純然たる広告とごく簡潔な出版情報が上記のとおり合わせて10点、それよりはやや詳しいコメント付きの『フィガロ文芸付録』『書店店頭』欄掲載のものが1点、これに前述のフェルナン・ヴァンデレムによる記事も加えると計11点となる。プルースト自身が依頼した新聞記事が1点。図書はジャック＝エミール・ブランシュ前掲書の他、「マルセル・プルースト頌」を含むポール・モランの詩集『アーク灯』³⁹⁾がこの時期に印刷されているため、計2冊となる。したがって以上18点を除く27点が一般的な意味での記事ということになる。

これらの記事は長さも内容もまちまちであり、そのことから当時の批評家がプルースト作品に対して何らかの統一的な見解を持っていたとは考えにくい。しかし総じて言えるのは、いずれの論評も小説に対して決定的な意見を持つには至っていないということであろう。予告された全5篇のうち2篇しか発売されていない状況では当然とも言えよう。作品評と呼ぶにはあまりにも内容のともなわぬものもあるなか⁴⁰⁾、対象を正面から論じた記事においてすら批判と賛辞が入り交じっており、前述の7月15日付『バリ評論』掲載のフェルナン・ヴァンデレムの記事もそのひとつだが、評者自身が己の作品理解に確信が持てない、あるいは批評軸を定めかねているように見える。

9月1日付『クラプイヨ』誌でドミニク・ブラガが述べていることは、当時の批評の実情をよく言い表している⁴¹⁾。『スワン』の発売以来、一部愛好家にとってプルーストは、真の読書家としての資質を測る試金石であった、と紹介したうえでブラガは次のように続ける――

実際のところ、マルセル・プルーストは大いに才能がある。それはもしかしたら才能以上のものだ。そしてこの才能は独創的なものだ。マルセル・プルーストの散文は何にも似ていない。その想像力は他のどの想像力も想起させることはない。私が知っているところでは、彼の小説の書評を書かねばならない批評家は全員、大変困惑している。なぜプルーストが好きなのか。それを言うのはひどく難しい。プルーストの著書は緻密で、際限がなく、途中で息を抜くこともできず、道筋も分からない。ひとつの考えが繰り返され、まるで終わりのない鎖のように展開されるのが常だ。うんざりするし、重荷だ。だから、もうだめだ、と、読むのを中断するとほっとする。

しかしこれは皮肉ではない。ブラガは、作品には一定の方法というものがなく登場人物たちも徐々にしか示されないが、人物像も判然としないまま、いつしか彼らのことを好きになってしまうと続けたのち、次のような言葉で記事を締めくくっている――

実際、プルーストは独自の時空間を持っていて、それは我々が生活上、時空間について抱いている通常の観念の埒外にある。この常ならぬ領域にすぐには入り込めないだろう。けれども一旦入ってしまえば見て学ぶことが多くある。そしてその案内人は一流だ。それははっきり言っておく。

現代の常識をもって当時の批評記事の価値を判断することは慎むべきであるが、それでもやはり突出した批評というのは存在するものだ。ポール・スーデーは当時最も有力な文芸批評家との評判が高く、『タン』の定期書評欄を担当するほか、それ以外の欄や他誌に記事を書くこともあった。スーデーに対する高い評価の根拠が示されることは少ないが、書かれた批評を読めば作品を読み込んでいることが容易に見て取れる。これは当時の批評家の誰にも見られることではない。

この時期、スーデーはジャック＝エミール・ブランシュの著書を『タン』で論じていた⁴²⁾。一見プルーストの小説とは無関係に思われる書評だが、その前半部は、プルーストが同書に寄せた序文の解説に費やされている。まずスーデーは、この序文が実際にはサント＝ブーヴの方法の踏襲を理由にしたブランシュ批判だと分析する。重要なのは、ブランシュの著作はそこまで非難されるべきものではないとしつつも、彼がプルーストにおける表層の自我と真の自我（すなわち芸術家としての本質）の峻別に注目している点だ。今日では周知だが、この区別は『失われた時を求めて』の根幹をなす概念のひとつであり、作者自身もしばしば表明するところだからである⁴³⁾。ブラガはプルーストを読み解く鍵を探しあぐねていたが、スーデーはここで有効な解読格子をひとつ見出したのである。

受賞直後の反響——記事数と部数

1919年のゴンクール賞は12月10日にその投票が行われた。事前に予想を出した新聞のなかにはプルーストを有力候補としてあげているものもあった⁴⁴⁾。

投票を受け、翌 11 日からは各紙がこぞってプールの受賞を報じる記事を掲載した。本稿で対象となる資料は『フランス書誌』に出された広告が 1 点、図書が 2 点、新聞・雑誌記事 139 点、合計 142 点ある。これら記事の多くは受賞直後に集中している。12 月 11 日付記事が 27 点、12 日付 11 点、13 日と 14 日付の記事は各 8 点、15 日から 18 日までにも 7 点の記事を数えることができ、受賞 1 週間以内の記事数は 61 点となる。以後 1919 年の年末までにさらに 16 点の掲載があったから、およそ 20 日間で記事総数 139 点の半数をゆうに超える 77 本の記事が発表された計算である。残る 62 点の掲載は翌 1920 年の初めから 9 月末頃までに渡って行われたことを考えると、受賞直後は「記事ラッシュ」といいいい状況であったのだ。そうしてみると、ゴンクール賞受賞前の記事類が 6 月 20 日から 12 月 10 日までの半年弱の間に総計 45 点あるのは、決して悪くないペースだとも考えられる。広告や友人の好意による記事も含まれているとはいえ、一般読者への宣伝という意味では通常の記事と同様の効果があるからだ。言い換えれば、受賞直後の記事数が異例なのである。では報道によって読者が増え、作品理解が進んだのだろうか。

受賞前にプールの関係の記事ないし広告を掲載した定期刊行物は 26、受賞後はその数が 80（うち受賞後に初めて記事が見られるものは 61 点）となる。当時の定期刊行物の発行部数を示した資料によって、受賞直後にプールの関係の記事を掲載した媒体の部数を可能な範囲で確認してみよう。問題の資料は、警視庁が作成していた月刊資料をフランス国立科学研究所が公表したものである⁴⁵⁾。すべての刊行物・年月について掲載されている訳ではないのだが、1918 年 8 月期の部数があがっているものは、受賞前については 10 媒体あり、それらの発行部数の合計は 1,027,000 部である。同様に受賞後については 27 媒体、3,608,500 部となっている⁴⁶⁾。この数字は、文学賞受賞によって、少なくとも作者と作品の名前がより広く知られることになったことを示している。ではそれら記事の内容はどのようなものであったのか。

受賞直後の反響——批判の主な理由

受賞直後の批評には、きわめて大きな特徴がある。まず受賞作決定の第 1 報であることは当然だが、この年のもうひとつの有力候補であったロラン・ドルジュレス『木の十字架』を引き合いに出してプールの受賞を非難するもの

が数多く見られるのである。その理由は共通している。プルーストはゴンクール賞を受賞するには年を取りすぎている、賞金を受けるには裕福すぎる、従軍していない、あるいは右派である、といったものだ。いずれも受賞していなければ受けることもなかった批判である。ロベール・ケンブは、ドルジュレスのほうが年齢的にもふさわしかったし、プルーストには既刊書があり新人とは言えないなどの理由から、12月11日付の記事で既に今回のアカデミーの決定は「ある作家をあまりに高く買いすぎたために嵐を引き寄せる」⁴⁷⁾ものだと告げている。

選考会議での投票について詳細に報じる記事も何点か見られる。一例を挙げると、12月11日付『ゴーロワ』の記事は上記のような批判はせず、受賞作の長所を述べているが、そのような優れた作品であっても「労せずして受賞したわけでは」なく3回の投票を要したとして、決定までの過程で票を得た作品を列挙している⁴⁸⁾。そのような記事を読むと、選考は大変な接戦であったかのように思える。しかしレオン・ドゥッフが著書『ゴンクール・アカデミー年代記』で、審査員のひとりエレミール・ブルジュの発言として伝えるところによると、審査員は「第1次投票ではわざと受賞の可能性の少ない候補に投票する」のであり、それが候補者にとって「ちょっとした広告」になるというのである⁴⁹⁾。つまり得票候補として報じられる機会を多くの作家に与えるという思惑から、当初は票の分散によって複数回の投票が行われるようしむけるということである。

またいくつかの記事は、選考委員会内部での勢力争いや政治的な思惑が働いたとも伝えている。『新民主主義』12月11日付の記事、すなわち選考結果の第1報は、その年の投票を右派と左派との戦いであったとはっきりとらえている。執筆者のポール・グセルは次のように書いている——「『花咲く乙女たちの陰に』は秀作だ。けれどもそういう理由でこの作品が選ばれた訳ではないことはよくお分かりだろう。プルースト氏は右派の候補者であった。一方の佳作『木の十字架』の作者ドルジュレス氏を推していた左派に右派が勝ったのである」⁵⁰⁾。かかる判断の根拠となったのは、王党派の新聞『アクション・フランセーズ』の主幹レオン・ドーデの支持である。それは受賞時には既に知られたことであった。同日付の『エコール・ド・パリ』は「マルセル・プルースト氏の支持に尽力したのはレオン・ドーデ氏である」⁵¹⁾と書いているし、『ラディカ

ル』は「レオン・ドーデ氏は今まさに新たな勝利を収めた。実を言えばこの勝利は、ゴンクール賞を目的としていたが、決して厳密に文学的なものではない⁵²⁾」と報じた。プルーストの書簡によると、審査員のひとり、ロニー兄もまた彼への支持を投票前に約束している⁵³⁾。そもそもプルーストとドーデ家の関係に政治性はない。たとえばドレフュス事件の際は、前者は再審支持派であり、レオン・ドーデの政治的志向とは相容れない。しかしそのような点は新聞記事を読む一般読者はあずかり知らぬことであり、彼らにとっては記事の内容がすべてである。上記のような一方的報道によってプルーストに関する特定のイメージが浸透したことは否めない。

作者の年齢や帰属社会階層にかんする議論は、本来、ゴンクールの遺言に沿った選択を委員会が行ったかが焦点であるはずだし、投票の詳細についてもアカデミー内部の問題である。しかしそれがプルースト自身の問題として読者に認識されてしまうことは大いにありうる。また1919年の受賞作は戦争文学か否か、という点を受賞作が決定する前から関心を引いていた⁵⁴⁾。受賞後も非戦闘員の作品が選ばれたことに遺憾の意を表明する論評が散見する。

12日付『ポピュレール』の記事を書いたのは、ひとりの元兵士である。彼はプルーストの受賞を受け、「この機会にドルジュレスには彼の作品が私のなかに引き起こした深い感動のすべてを伝えたい」とドルジュレスに対する共感を示し、またアカデミーの選考結果とは異なるが「我々復員兵は〔…〕彼を選んだ⁵⁵⁾」と書いている。14日付『コメディア』に掲載されたビネ＝ヴァルメールの記事は、2人の人物の対話という一風変わった形式を取っている。一方が受賞作は優れた作品だし、アカデミーも戦争のことばかり考えるのをやめて良かったと述べるのに対し、もう一方は「ドルジュレスが負けてプルーストが受賞するだろうと知った夜、気分が良くなかった。元兵士たちに対して極めて激しい反発が準備されているのではないか⁵⁶⁾」と返答する。戦後早くも世間が復員兵を邪魔者扱いしていることへの懸念を表明するものである。この記事を受けてロニー兄は12月23日付『コメディア』で、過去5年の受賞作が戦争文学だったのであるから、ひとつくらい「平和賞」があってもいいのではないかと反論している⁵⁷⁾。戦争文学か否かという論点は、作者の年齢や地位とは異なり、作品そのものの価値評価に関わるものであるかのような印象を与える。しかしプルーストとドルジュレスに関するかぎり、この点にこだわることは問題を矮

小化するように思われる。ヴェルサイユ講和条約が締結されたのは6月28日、丁度『花咲く乙女たち』の発売時にあたる。ブルーストの新作発表を報じる新聞には、条約関係の記事が大きく掲載されている。そのような状況で1919年、戦後初のゴンクール賞も戦争文学に与えられることが期待されていたとすれば、それも理解できないではない。だが一層本質的なのは作品に対する評価であろう。

戦争文学への評価——政治判断と文学的評価

なるほどロニー兄の言うとおりの通り、大戦が勃発した1914年からブルーストが受賞する前年の1918年まで、ゴンクール賞の受賞者は全員、多かれ少なかれ戦争に関わった作家たちであった。1915年は候補作がルネ・バンジャマン『ガスパール』1点しかなかったのだが、同作は著者が一兵卒として出征中に負傷、その後の入院中に書かれたもので、ひとりのパリジャンが軍隊で過ごす物語である。1914年度分の選考は1916年に行われ、アドリアン・ベルトラン『大地の呼び声 *L'Appel du sol*』が選ばれた。作者は1914年戦場で負傷し、それが元で1917年に亡くなっている。1916年の受賞作アンリ・バルビュスの『砲火』も作者自身の戦争体験を元にした極めてリアルな描写を多用した作品である。翌1917年、『拳の炎 *La Flamme au poing*』で受賞したアンリ・マレルブは、のちに旧従軍兵士会の会長もつとめた。1918年には何度も有力候補と目されていたジョルジュ・デュアメルが『文明』で受賞しているが、彼もまた志願兵として従軍した経験を作品に活かしている。

このように書くと、ゴンクール賞の選考委員会はあたかも従軍経験者のみを特別扱いしたように見えるが、実際にはどうだったのであろう。ゴンクール賞受賞時47という年齢が高いとして批判されたブルーストですら第1次世界大戦では招集を受けているのであるから、それより若い作家たちが戦争に赴いたのは必然であり、候補者の多くが、そして受賞者の全員が従軍経験者であったことは実は驚くに当たらないとも言えよう。じじつ、『ゴンクール・アカデミー年代記』によれば、1916年の候補作50点のうち少なくとも40点が従軍経験者の作品だったのである⁵⁸⁾。

また、元兵士たちやその作品は様々な批判を免れたのかと言えば決してそうではない。1915年の受賞作、ルネ・バンジャマン作『ガスパール』を例にとる

と、『アクション・フランセーズ』は受賞前日の12月1日、作品の主人公の描き方について次のような評を掲載した――

〔…〕ロスタンが磨きをかけ、この戦争のはじめから体制的なジャーナリズムがひどく濫用してきた、型にはまった兵士のようなものは何もない。中道右派で、流行遅れの美学に合致した兵士と呼びたいようなものである。社会主義の選挙人がまだ残っているような極左のジャーナリズムが濫用したベランジェやフェリックス・ピア式の革命家の兵士のようなところも全くない。ガスパールはこの2つの紋切り型を免れている。率直で、勇敢で、忠実で、ずるく、もちろん抜け目なく、どんなばかげた冗談も受け入れ、即座にそれに言い返す、気のいい仲間だ。これもひとつの型ではあるが、この類型化は度を超してもいないし、滑稽でもない〔…〕。⁵⁹⁾

この絶賛と言ってもよいほめ様は、裏返せば戦争文学のなかにも様々な政治的思惑が反映されており、それぞれに支持者と反対者がいたことを示している。

ポール・スーデーもバルビュス『砲火』について、大筋では読むに値する、また書かれるべきだった本であるとしながらも、著者の社会主義への傾倒を批判している。作品掉尾で展開される哲学的議論を読むのに「バルビュス氏や幾人かの登場人物たちのように社会主義者である必要はない」⁶⁰⁾とし、また社会主義的主張が宗教と結びつけられることに嫌悪を示している。「バルビュス氏は自由と友愛を軽視しすぎており、それらを徹底的に平等の犠牲にする。彼の言うところでは、平等ほど重要なものはない、平等だけが〈多数派の神聖なる意思〉とともに〈真に崇高な力をもって〉あらゆる進歩をもたらすということだが、この宗教用語は適切だろうか」とスーデーは問うている。戦争文学はしばしば政治的主張を含む以上、書評においてもその点が問題になるのは当然であろう。しかしスーデーの批判は、イデオロギー的なものにとどまらず、小説技法そのものについても次のような苦言を呈している――

しかしながらこれは次々に書き留められた記録の集積にすぎない。時間の経過以外の秩序もなく、主導役を果たす筋書きもない。どこから初めても、あるいはどこで終わっても構わない。〔…〕作者はこの400頁の後に、さらに同じような400頁を付け加えることもできたらう。どういう理由からかは分からないが、作者が選んだ箇所は、同じようなものであり、他の何かと取り替えても構わないようなものである。作品をもっと短くしても、ページ順を変更しても、たいした支障はない。

このような批評家の態度は、戦争文学だからといって、そのすべてが広く歓迎

されていたわけではないことをはっきり示していよう。

『木の十字架』に対する当時の評価と世間の期待

では『木の十字架』の評判は当時どのようなものであったのだろうか。まず印刷部数の点で同作が『花咲く乙女たちの陰に』を大きく上回っていたことはティエリー・ラジェがすでに明らかにしている。彼が版元からの情報によって示す各印刷部数は次のとおりである⁶¹⁾ ——

『木の十字架』

- ・1919年3月 5,507部, 6月 6,121部, 8月 5,794部, 12月 11,776部
- ・1920年2月 23,524部, 5月 21,629部, 11月 10,807部

『花咲く乙女たちの陰に』

- ・1919年6月 3,300部⁶²⁾, 11月 6,600部
- ・1920年1月 6,600部, 7月 6,600部

いずれも1920年の最後の印刷部数までを示しているため、条件は同じである。総印刷部数は前者が85,158部であるのに対し、後者は23,100部にとどまっている。

売れていただけではない。批評家たちの記事を見ても、『木の十字架』の評判は上々である。4月15日付『エコー・ド・パリ』の記事は、ドルジュレスのイデオロギー的側面と小説作法の双方を次のように高く評価する——

これはもはや戦争に反対だとか賛成だとかいう作品ではなく、真の戦争作品であり、宣言もなければ「プロパガンダ」もない。たとえば『木の十字架』には『砲火』と同じくらい多くの野卑な言葉が出てくるが、ドルジュレス氏は兵士の生き生きとした語彙をごく自然に使う。というのも話しているのは兵士たちだからである。バルビュス氏は、兵士言葉の荒々しさに自分はひるまないぞと言うためにわざわざ1章を割いている。ドルジュレス氏はそんなことをする必要などないのだ。⁶³⁾

6月22日付『シエークル』紙もドルジュレスは「真実を述べている。大声を出すこともなく、大言壮語することもない。というのも素材が真実であれば、それだけで十分だからだ。この詰まった印刷の400頁には無駄な行は1行もない。こういった賛辞を受ける小説は今日ではわずかであろう」⁶⁴⁾と述べて賞賛を惜しまない。

ドルジュレスの作品は、何も戦争文学であるという理由だけで批評家たちに評価されていたわけではない。印刷部数からしても『木の十字架』の一般的な評判はプルースト作品を上回っていたと考えても無理はないだろう。とすれば受賞作が激しく批判されたのは、『木の十字架』に対する期待の裏返しであろう。アカデミーの選考結果が一般の期待と異なることはこの年に限らないだろうが、受賞作決定のニュースにおいて落選作がここまで擁護されることも少ないのではないか。冷静に考えれば2つの全くタイプの違う小説作品の優劣をその内容によって決定することは不可能なことである。したがって作品の内在的価値を論拠にアカデミーの選択を批判することは困難であり、『木の十字架』の受賞を期待していた人々が選考結果に対する不満を表明するにあたって、比較しやすい作者の年齢、経済状況、従軍経験の有無といった外的要素を捉えてプルーストを攻撃したのだとしても不思議はない。

かくのごとく単純化された批判が巷に流れ、それが繰り返されたことには理由がある。受賞報道の特徴のひとつは、新聞・雑誌の購読者に対し、作家と作品の紹介を一から行う点にある。プルーストに対する紋切り型の批判は、プルーストという存在を全く知らなかった人々にも受け入れやすい手引きとして機能したと考えられる。受賞記事を紹介した媒体の発行部数についてはその一部を先ほど確認したが、多種多様な一般読者に理解される情報とはそのようなものでなければならなかっただろう。職業的批評家さえもがプルーストをどう読むべきか迷っているこの時期には、たやすく受け入れられ納得される情報というのはそれほど複雑・難解な分析ではありえなかったからだ。こうしてプルーストに関する一定のイメージが多くの人々に刷り込まれたのである。

作品が商品化するとき

ティエリー・ラジェは上記の印刷部数をふまえ、「ゴンクール賞のあと、ドルジュレスだけが宣伝と論争の恩恵を受けた」⁶⁵⁾と結論づけている。けれどもプルーストに対する当時の批評記事からは、受賞によって販売部数が伸びると一般に考えられていたことが読み取れる。12月18日付『ノール県および自由地域の声』の記事は、その信憑性はともかく、大衆にはゴンクール賞のような導き手が必要で、今回の受賞がなければプルーストを読まなかったような人々が書店に押しかけ『花咲く乙女たち』を買い求めているとし、さらには「さあ、

皆にならおう、『失われた時を求めて』を買おう」⁶⁶⁾とまで呼びかけている。ルイ・アラゴンは『文学』1920年1月号掲載のわずか6行の紹介文のなかで、受賞はNRF社にとって「すばらしくうまい話」⁶⁷⁾であると書いた。同月2日付『ボンソワール』はNRFの増刷分がそれまでの1巻本を2分冊にしたことを取り上げ、出版社は受賞という「偶然の出来事」を利用して1巻本の供給を止め、2巻本を売りつけて2倍儲けようとしていると皮肉っている⁶⁸⁾。この2巻本とは1919年11月の増刷分のことで、じっさい『フランス書誌』の12月19日号が販売中の書籍として『スワン家の方へ』と『花咲く乙女たち』の各2巻本の広告を掲載している⁶⁹⁾。『花咲く乙女たち』が一時書店で品切れになっていたことは事実である。プルースト自身、受賞前の12月初め、友人たちに献呈するための初版本が手に入らないとガストン・ガリマールに書き送っていたが、受賞から10日ほどたった頃、今度は書店に『花咲く乙女たち』を買いにやらせたが在庫がないと苦情を述べている⁷⁰⁾。ただし出版社がわざと供給を止めたという証拠はない。売り上げの増加についてはプルーストも興味を示しており、同月下旬にガストン・ガリマールに宛てた書簡で、『花咲く乙女たち』がアカデミー・フランセーズ大賞を受賞しなかったのは残念だが、販売という観点からはゴンクール賞の方が好ましかった、受賞により「一気に第30版まで」⁷¹⁾印刷する事態になると周囲の誰もが言っている、と記している。

よく知られたエピソードであるが、『木の十字架』の版元アルバン・ミシェルは文学賞選考後、早速本に帯を着けて販売した。そこには「ゴンクール賞、10票中4票」と大きく、「ヴィ・ウールーズ賞受賞作、14票中9票」と小さく書かれていたのである。これ対してはプルーストも不快感を示し⁷²⁾、NRF社も提訴に踏み切り勝訴した。しかも一件はメディアでも報じられた⁷³⁾。この出来事が出版社同士の紛争となったのは、受賞者の名誉のみならず出版社の利益、つまり売れ行きを左右しかねない問題と考えられたからだ。文学賞受賞と作品の販売部数との相関関係についてティエリー・ラジェの見解は否定的であった。むろん受賞していなければ売れ行きはもっとふるわなかったという可能性もあるだろう。いずれにせよ当時の関係者はゴンクール賞に対して販売促進の効果を期待していたことは間違いない。そしてそのような期待を込めた発言や記事は、小説を「作品」ではなく、より多く売るべき「商品」として扱う傾向が強い。受賞をめぐる世間に騒がれることは、文学作品にとって本来的でない様々

な影響をもたらすのである。

受賞と読者の増大への期待

ゴンクール賞受賞が「作品」としての『花咲く乙女たち』の読者層拡大に貢献したかどうかについて、資料は何を語っているだろう。上述のとおり、受賞と同時に作品評は一旦振り出しに戻った感がある。受賞報道の時点で記事を書いているジャーナリスト本人すら作品を読んでいないといった事態は決して稀ではない。たとえば12月13日付『シエークル』の記事の担当者ははっきりとそう述べている⁷⁴⁾。12日付『作品』の記事などは実際には『花咲く乙女たち』を読んでいないことを公言しながらブルーストを批判しているために⁷⁵⁾、23日付『コメディア』でロニー兄に、「したがってド・ラ・フーシャルディエール氏はマルセル・ブルーストの本を読んですらいない。なのに確信を抱いている」と咎められる始末である⁷⁶⁾。それだけならまだしも、16日付『デベッシュー・ド・プレスト』の記事は「ブルーストには賛美者しかいないが、そのうち誰もブルーストの本1冊ですら通して読んでいない」とまで言い切っている⁷⁷⁾。当初の報道合戦がやや落ち着いた1920年1月15日付『ミネルヴ・フランセーズ』掲載の記事でも、ジョルジュ・ル・カルドネルは「一般にジャーナリズムはマルセル・ブルーストのゴンクール賞受賞をかなり厳しくとらえたが、それは不満を表明する人たちがブルーストの作品をよく知らないからだろう」と述べている⁷⁸⁾。

レオン・ドーデは受賞発表後さほど日を置かず、「大衆はマルセル・ブルーストの名を知ることになるだろう。かれは興味深くすばらしい本を数冊書いているが、これまでは注意深いえり抜きの読者しかこれを読んでいなかった」と書いていた⁷⁹⁾。たしかに彼の予告通り受賞によって知名度は上がった。しかし読者層については、ブルースト作品に通じた批評家たちから、傑作ではあるが広く一般の支持を得ることは難しいのではないかとの懸念が表明される。そのひとり、フランシス・ド・ミオマンドルは受賞直後の12日付記事ですでに「アカデミー・ゴンクールが関心を示したばかりのこれらの本に対する一般大衆の反応を見るのは好奇心をそそられることである」と述べるが⁸⁰⁾、彼自身は、ブルースト作品が多くの人々に受け入れられるとは考えていない。翌年1月に入ってからも「ブルーストは大衆の心をつかむだろうか。もしそうになったら驚きだ」

との意見がアンドレ・テリーブから発せられる⁸¹⁾。

文学作品としての『花咲く乙女たちの陰に』に対する評価

ミオマンドルやテリーヴが懸念したとおり、受賞後に作品内容に関する真摯な批評が増え分析の幅が広がったかという点、必ずしもそういうわけにはいかなかった。筆者の調べた範囲では、プルーストはこの時期に出た多くの批評への反論のため、受賞後一度だけ『フィガロ』に擁護記事を請うている⁸²⁾。この依頼に応じて1920年2月8日の『フィガロ』文芸欄に発表されたのがモーリス・ルヴァイヤンの署名記事である――

彼の2冊の小説は〔…〕通常の論理的規則に従って構成されているのではない。作者は観念連想のゲームに従っているにすぎないなどと言うことはできない。作品を構成する秩序は微妙で感知しがたく、ほとんど隠されており、古典的な大作家が従った原則よりもベルグソン氏が予見した柔軟な法則により近い。⁸³⁾

作品の全体構想に関するこの説明は、第1巻発売当時にプルースト自身ですでに述べていたものでもある。「けれども論争は終わった。マルセル・プルースト氏が優れた、また独創的な才能の持ち主であることを否定する者はもういない」⁸⁴⁾と、作家の主張を汲んだこの擁護記事は、裏返せば、その執筆者もまた作品が十全の理解をえていないという認識を共有していた証左であろう。

ゴンクール賞受賞後に発表された記事のなかで作品理解への新たな糸口となる可能性があったのは、1920年7月になってピエール・ラセールが発表した評論である⁸⁵⁾。プルーストの使う比喩ほど特別なものはないと評価し、いくつかの例について詳細に解説しているのだが、それでもまだ比喩が作品構造全体を支える重要な役割を果たすと喝破するには至っていない。

有名になるとはどういうことか

以上を総合すると、プルーストの名前と作品のタイトルが受賞報道によって多くの人々に知られることになったのは明らかである。出版社や作者本人から働きかけなくとも各紙誌がここまで話題にしてくれるというのは第1篇発売当時には考えられなかった恩恵ではあるが、出版側はその内容に関与できない。受賞時に繰り返された選考に関する批判は本来、委員会に向けられたものでは

あったが、受賞作と作者への否定的な見解が浸透した可能性も高い。本の販売に関して言えば、受賞は部数増の保障ではなかった。また販売部数と実際の読者数は同じではないことも考え合わせると、作品は評判になったほどには広汎な読者を獲得したとは言えない。

著者名やタイトルが人口に膾炙するがゆえに読んでみたいと思う者は多いが、難解との評判も高く、実際にはさほど読まれていない作品——。しばしば人はそれを「大作」と呼び、著者を「巨匠」扱いするものだが、ゴンクール賞受賞直後のプルースト作品はまさにこれに当てはまる。本稿冒頭にあげた文学史家や伝記作家の言う「栄光」とは実際にはそのようなものではないだろうか。だとすれば、以上の調査・検討が示唆するのは、この留保付きの「栄光」への歩みが、『失われた時を求めて』第2篇発売の時点ですでに始まっており、そこでゴンクール賞が果たした役割は小さくなかったということなのだ。

註

- *) 本稿は拙論「『失われた時を求めて』初期受容——『スワン家の方へ』をめぐる——」、『ステラ』第30号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2011年12月、191-207頁の続稿である。本稿執筆にあたっては、次の学位請求論文で使用した資料に若干の記事を追加して使用した（使用した資料は基本的にフランス本土で出版されたものであるが、本稿で対象としたなかには『ジュネーヴ週刊文芸 *La Semaine littéraire de Genève*』掲載の記事2点が含まれている）—— Tomoko Boongja Woo, *La Réception d'«À la recherche du temps perdu» en France de 1913 jusqu'en 1954*, thèse de Doctorat, Univ. de Paris III, 2011, 2 vol. 上記論文でも『花咲く乙女たちの陰に』受容を扱っている。本稿はこれに大幅に加筆したものであるが一部論旨が重複していることをお断りしておく。また稿中、プルーストの書簡については特に記載のないかぎりフィリップ・コルブ編集の版 (Philip Kolb éd., *Correspondance de Marcel Proust*, Paris : Plon, 21 vol., 1970-93) に依った。引用に際してはこれを *Corr.* と略す。書簡の日付がコルブによる推定の場合、括弧〔 〕内にこれを記載する。
- 1) 最終篇『見出された時』は1927年10月に発売された。問題の伝記の初版印刷完了日は1925年6月4日。その後、著者が後に発表した論考を追加して何度か改版され、いずれも多くの版を重ねた。本文中の引用は次の版に依った—— Léon PIERRE-QUINT, *Marcel Proust, sa vie, son œuvre*, Paris : Le Sagittaire, 1925.

- 2) *Ibid.*, p. 107.
- 3) 次のフランス語版から訳出した——George D. PAINTER, *Marcel Proust*, éd. revue et augmentée, Paris : Mercure de France, 1992, p. 773. 最初のフランス語訳は1966年の出版である。このフランス語翻訳も版を重ね、21世紀に入ってからでも文庫版が出版されている (*Marcel Proust : 1871-1922*, Paris : Tallandier, 2008)。
- 4) Gustave LANSON, *Histoire de la littérature française*, Paris : Hachette, 1895. 1924年には第18版が出されている。
- 5) Gustave LANSON et Pierre TUFFRAU, *Manuel illustré d'histoire de la littérature française*, Paris : Hachette, 1929, p. 711.
- 6) 同第4版, 1932年刊, 757-758頁。
- 7) Thierry LAGET, «L'attribution du prix Goncourt à Marcel Proust», *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 14, 1983, pp. 63-71. 引用部分は70頁。印刷部数とこれに関するラジェの見解については70-71頁参照。
- 8) Jean-Yves TADIÉ, *Marcel Proust : biographie*, Paris : Gallimard, 1996, p. 831.
- 9) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. IV 1989, p. 1503 記載の编者による書誌情報による日付。
- 10) Jacques-Émile BLANCHE, *Propos de peintre*, 1^{re} série, *De David à Degas*, préface de Marcel PROUST, Paris : Émile-Paul frères, 1919.
- 11) Marcel PROUST, «À propos du "style" de Flaubert», *La NRF*, 1^{er} janvier 1920, repris dans *Contre Sainte-Beuve*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, pp. 586-600.
- 12) LE VEILLEUR, «Le Pont des Arts», *Excelsior*, 17 octobre 1917, p. 4.
- 13) Émile HENRIOT, «La vie littéraire. Roman. Marcel Proust, *Le Côté de Guermentes*», *La Vie des peuples*, 25 septembre 1920, pp. 151-153.
- 14) それぞれ次の通り——Gilbert CHARLES, «Marcel Proust», *Revue critique des idées et des livres*, 25 septembre 1920, pp. 677-683 ; Jean FARON, «Notes brèves. *La Recherche du temps perdu*», *Le Petit Var*, 28 septembre 1920, p. 1.
- 15) *Corr.*, t. XIII, lettre 240, pp. 408-409.
- 16) Marcel PROUST, *Du côté de chez Swann*, Paris : Grasset, 1913. 引用の続刊予告は内表紙の前にあり, 頁はふられていない。
- 17) Voir *Corr.*, t. XV, lettre 124, 29 août 1916, de Bernard Grasset à Marcel Proust, pp. 279-280. この書簡でグラッセは出版放棄をプルーストに伝えている。
- 18) Voir *Corr.*, t. XVI, lettre 130, 13 octobre 1917, à Mme Catusse, p. 257. プルーストはこの書簡で, NRF社から5,000ページもの校正刷りを受け取ったと述べている。
- 19) Voir *ibid.*, lettre 144, [le samedi soir 3 novembre 1917], p. 280.
- 20) *Excelsior*, art. cité.
- 21) ORION, «Le carnet des lettres des sciences et des arts. À travers les revues», *L'Action française*, 29 août 1918, p. 4.

- 22) Voir *Corr.*, t. XVII, lettre 146, [peu avant la mi-septembre 1918], pp. 355-356.
- 23) Marcel PROUST, «Légère esquisse du chagrin que cause une séparation et des progrès irréguliers de l'oubli», *La NRF*, 1^{er} juin 1919, pp. 71-120.
- 24) 『ステラ』30号掲載の前掲拙論参照。
- 25) *Bibliographie de la France*, III^e partie, 20 juin 1919, pp. 1044-1045.
- 26) *Corr.*, t. XVIII, lettre 137, p. 277.
- 27) 挟み込みの広告ページ (cahier publicitaire)。Voir *ibid.*, p. 278, n. 3.
- 28) 『新フランス評論』は挟み込みの広告ページに掲載。他はそれぞれ無署名の「書籍情報 Bulletin du livre」欄。掲載日付とページは以下の通り——*L'Intransigeant*, 27 juin 1919, p. 2; *Le Temps*, 27 juin 1919, p. 5; *L'Écho de Paris*, 26 juin 1919, p. 3; *L'Action française*, 26 juin 1919, p. 4.
- 29) Fernand VANDÈREM, «Les Lettres et la vie», *Revue de Paris*, 15 juillet 1919, pp. 429-431.
- 30) *Corr.*, t. XVIII, lettre 136, p. 276.
- 31) Fernand VANDÈREM, *art. cité*, p. 429.
- 32) *Ibid.*, p. 431.
- 33) BARTHOLO [pseud. de Robert DREYFUS], «Une rentrée littéraire», *Le Figaro*, 7 juillet 1919, p. 1.
- 34) *Corr.*, t. XVIII, lettre 123, [le lundi 16 juin], p. 265.
- 35) *Ibid.*, lettres 163, [le lundi soir 7 juillet 1919], pp. 311-312. ブルーストは記事掲載時には編集長ロベール・ド・フレールにも掲載への礼状を送っている (*ibid.*, lettres 162, pp. 310-311)。こちらもコルブによる推定日付は記事の日付と同じ7月7日。
- 36) *Ibid.*, lettres 171, [10 juillet 1919], p. 320.
- 37) ただしそのうち2点は直接現物を閲覧できず、引用によって確認したことをお断りしておく。
- 38) Jean GIRAUDOUX, «Chronique littéraire. Du côté de chez Marcel Proust», *Les Feuilles d'art*, mai 1919, pp. 2, 17 et 18.
- 39) Paul MORAND, *Lampes à arc*, avec des lithographies de Frans Masereel, Paris : René Rieffer, copyright 1919 [Bnf Tolbiac RES M-Z-84]. Voir «Ode à Marcel Proust», p. 47. 「マルセル・ブルースト頌」は1915年作との記載がある。1920年になってオ・サン・パレイユ社からも出版されるが、この版の印刷完了日は1919年10月10日。問題の詩は17-19頁に掲載。本稿では前者をゴンクール賞受賞以前の時期に、後者は受賞以後の時期に発表されたものとして分類した。この詩の内容についてブルーストはモランに不満を述べている (voir *Corr.*, t. XVIII, lettre 242, pp. 421-422)。コルブはこの書簡を上記印刷完了日である10月10日少しあとのものと推定している。
- 40) とりわけ目立つのは、次の記事である——Léon LOUIS-MARTIN, «À la manière de

Marcel Proust. À l'ombre d'un jeune homme en boutons (Légère esquisse de l'opportunité d'une visite, de la difficulté croissante d'un départ)», *Le Crapouillot*, 1^{er} octobre 1919, p. 7. これは『新フランス評論』1919年6月号に掲載された小説の抜粋「別離が引き起こす悲しみと忘却の不規則な進展の軽い素描」(前出)のパロディーである。ブルーストはこの記事に当惑した、とジャン＝ルイ・ヴォードワイエに書き送っている (voir *Corr.*, t. XVIII, lettre 241, [première quinzaine d'octobre 1919], p. 420)。また1913年当時の批評もそうであったし、以後もその傾向が続くのであるが、ブルーストの実生活について述べる記事も見られる。たとえばアンドレ・ビイは8月26日付の記事でブルーストと社交界の関係を皮肉に書いている (voir André BILLY, «*À l'ombre des jeunes filles en fleurs, Pastiches et mélanges* par Marcel Proust», *L'Œuvre*, 26 août 1919, p. 4)。これに対してはジャック＝エミール・ブランシュが9月22日付『フィガロ』の一面で早速反論している (voir Jacques-Émile BLANCHE, «Critique "sociale"», *Le Figaro*, 22 septembre 1919, p. 1)。ブルーストはこの反論に対する礼をブランシュに述べている (voir *Corr.*, t. XVIII, lettre 232, p. 406)。

- 41) Dominique BRAGA, «*Du côté de chez Swann. À l'ombre des jeunes filles en fleurs*», *Le Crapouillot*, 1^{er} septembre 1919, p. 6. 以下の引用はいずれも同頁からのものである。
- 42) Paul SOUDAY, «Les livres. Jacques-Émile Blanche, *De David à Degas (Propos de peintre)*, avec préface de M. Marcel Proust, etc.», *Le Temps*, 31 octobre 1919, p. 3. ブルーストはこの書評で自分の序文を適切に扱ってくれたとしてスーデーに礼状を送っている (voir *Corr.*, t. XVIII, lettre 266, 10 novembre, 1919, pp. 462-465)。
- 43) たとえば次を参照—— Marcel PROUST, «La méthode de Sainte-Beuve», dans *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélange* et suivi de *Essais et articles*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», pp. 219-232, notamment p. 221.
- 44) たとえば次の記事—— [ANONYME,] «Lettres et arts. Le prix Goncourt», *Le Cri de Paris*, 7 décembre 1919, p. 8 ; René LEBOUQ «Le prix Goncourt», *L'Entente : le grand économique quotidien du soir*, 8 décembre 1919, p. 1 ; André BILLY, «Le prix Goncourt», *L'Œuvre*, 10 décembre 1919, p. 3.
- 45) Pierre ALBERT, Gilles FEYEL et Jean-François PICARD, *Documents pour l'histoire de la presse nationale aux XIX^e et XX^e siècles*, Paris : Centre de documentation sciences humaines : Éditions du C.N.R.S., [1977], p. 69. 1918年8月期については元になった資料は次のとおり—— «Tirage des journaux quotidiens», tableaux mensuels dressés par le Service des renseignements généraux de la Préfecture de Police. Archives de la Préfecture de Police, cote 16N 1561.
- 46) 『エコー・ド・パリ』については地方版、『ラントランジジャン』はパリ版、『マタ

- ン] 紙についてはパリと地方の両版を合わせた数字を使用。
- 47) Robert KEMP, «Les Lettres. Le quinzisième prix Goncourt», *La Liberté*, 11 décembre 1919, p. 2.
- 48) G[aston] R[AGEOT], «Le prix Goncourt», *Le Gaulois*, 11 décembre 1919, p. 1.
- 49) Léon DEFFOUX, *Chronique de l'Académie Goncourt*, Paris : Firmin-Didot, p. 117.
- 50) Paul GSELL, «Nos échos. Au jour le jour», *La Démocratie nouvelle*, 11 décembre 1919, p. 2.
- 51) Gérard BAUËR, «Le prix Goncourt à Marcel Proust», *L'Écho de Paris*, 11 décembre 1919, p. 1.
- 52) L'HOMME D'ÉCOUTE, «Les échos», *Le Radical*, 11 décembre 1919, p. 1.
- 53) Voir *Corr.*, t. XVIII, lettre 254, de Rosny aîné à Marcel Proust, 29 octobre 1919, p. 441. ここでロニー兄は「今回は私の票をあなたに入れてさせて下さい」とはっきり書いている。
- 54) たとえば次の記事—— [ANONYME.] «Le prix Goncourt», *Le Journal des Débats*, 11 décembre 1919, p. 3. 11日付の記事であるが、まだ投票結果が発表されていない時点で原稿が書かれている。
- 55) Noël GARNIER, «À l'ombre des Goncourt», *Le Populaire*, 12 décembre 1919, p. 1.
- 56) BINET-VALMER, «La semaine littéraire», *Comoedia*, 14 décembre 1919, p. 2.
- 57) J.-H. ROSNY AÎNÉ, «Le tréteau des lettres. L'opinion littéraire. Le cas de Marcel Proust», *Comoedia*, 23 décembre 1919, p. 2.
- 58) Léon DEFFOUX, *op. cit.*, pp. 124-125.
- 59) Léon DAUDET, «Gaspard», *L'Action française*, 1^{er} décembre 1915, p. 1.
- 60) Paul SOUDAY, «Les livres», *Le Temps*, 15 décembre 1916, p. 2.
- 61) Thierry LAGET, *art. cité*, p. 71.
- 62) 『花咲く乙女たちの陰に』の初刷りについてはガストン・ガリマルがブルーストに宛てた書簡のなかでより詳しい数字をあげている。それによれば NRF 社は第6版（今日の慣用では第6刷にあたる）までを一度に印刷し、1版から6版までを同時に売り出した。各版の部数とその合計は次の通り—— 524, 531, 555, 654, 516, 552, 計3,424部。Voir Marcel PROUST et Gaston GALLIMARD, *Correspondance*, Paris : Gallimard, 1989, lettre 124 (de G. Gallimard à M. Proust), 3 décembre 1919, pp. 205-210, notamment p. 208.
- 63) F[RANC]-N[OHAN], «On lira. *Les Croix de bois*, par Roland Dorgelès», *L'Écho de Paris*, 15 avril 1919, p. 2.
- 64) Michel GEORGES-MICHEL, «La ville et les arts. Un livre», *Le Siècle*, 22 juin 1919, p. 2.
- 65) Thierry LAGET, *art. cité*, p. 70.
- 66) VERAX, «Prix Goncourt», *Le Cri du Nord et des régions libérées*, 18 décembre 1919, p. 1.

- 67) Louis ARAGON, «*À l'ombre des jeunes filles en fleurs*», *Littérature*, janvier 1920, p. 30.
- 68) Paul-André BENOIT, «Un joli “truc” de librairie. D'un seul prix Goncourt on fait deux volumes», *Bonsoir*, 2 janvier 1920, p. 1.
- 69) [ANONYME], «[En vente. Prix Goncourt. Œuvres de Marcel Proust *À la recherche du temps perdu*. Première partie, *Du côté de chez Swann*. Deuxième partie, *À l'ombre des jeunes filles en fleurs*. Rappel. Marcel Proust, *Pastiches et mélanges*]», *Bibliographie de la France*, III^e partie, n° 51, 19 décembre 1919, pp. 2364-2365.
- 70) Voir *Corr.*, t. XVIII, lettre 282, [peu avant le 3 décembre 1919], p. 491 et lettre 320, [21 décembre 1919], pp. 549-550. 初版が入手できないという問題については NRF 社が第1版から第6版までを同時に印刷・販売したことが理由である。前註 62 を参照のこと。
- 71) *Ibid.*, lettre 331, [peu après le 26 décembre 1919], p. 565.
- 72) *Ibid.*, lettre 318, de Proust à Jacques Boulenger, [20 décembre 1919], p. 524 et n. 4 ; lettres 320, à Gaston Gallimard, [21 décembre 1919], p. 550 et lettre 333, à l'abée Mugnier, [deniers jours de décembre 1919], p. 569.
- 73) [ANONYME], «Les prix littéraires», *L'Indiscret*, 25 décembre 1919, p. 7. 裁判結果を報じた記事は次の通り——DÉRIVE, «“Comoedia” au Palais. À propos du prix Goncourt», *Comoedia*, 3 juin 1920, p. 2.
- 74) Maurice de WALEFFE, «Les deux Académies», *Le Siècle*, 13 décembre 1919, p. 1.
- 75) G. de la FOUCHARDIÈRE, «Hors d'œuvre : cuisine électorale», *L'Œuvre*, 12 décembre 1919, p. 2.
- 76) ROSNY AÏNÉ, «Le tréteau des lettres. L'opinion littéraire. Le cas de Marcel Proust», *Comoedia*, 23 décembre 1919, p. 2.
- 77) Pierre VLAMONT, «Lettre de Paris. Le prix Goncourt. — M. Marcel Proust a-t-il été frigorifié ? — “À l'ombre d'un jeune homme en bouton”. — Un mystère dévoilé», *La Dépêche de Brest*, 16 décembre 1919, p. 1.
- 78) Georges LE CARDONNEL, «Le mouvement littéraire. Les romans. Les œuvres de Marcel Proust : *Le Plaisir et les jours* [sic], préface d'Anatole France, illustrations de Madeleine Lemaire ; *À la recherche du temps perdu* : Tome I : *Du côté de chez Swann* ; Tome II ; *À l'ombre des jeunes filles en fleurs* ; *Pastiches et mélange*», *La Minerve française*, 15 janvier 1920, pp. 219-223. 引用部分は 219 頁。
- 79) Léon DAUDET, «Un nouveau et puissant romancier : Marcel Proust», *L'Action française*, 12 décembre 1919, p. 1.
- 80) Francis de MIOMANDRE, «La vie des livres. Le prix Goncourt, Marcel Proust», *L'Événement*, 12 décembre 1919, p. 2.
- 81) André THÉRIVE, «Des lauréats», *Revue critique des idées et des livres*, 10 janvier

- 1920, pp. 75-76.
- 82) 依頼の詳細についてはロベール・ド・フレール宛の次の書簡を参照のこと—— *Corr.*, t. XIX, lettre 37, [premiers jours de février 1920], pp. 110-111.
- 83) Maurice LAVAILLANT, «Du côté de chez les Goncourt», *Le Figaro, supplément littéraire*, 8 février 1920, p. 2.
- 84) *Idem.*
- 85) Pierre LASSERRE, «Marcel Proust, humoriste et moraliste», *La Revue universelle*, 1^{er} juillet 1920, pp. 19-32.